

尽き果てぬ、歩き旅への思い。



英語も話せず人前で話すことすら苦手な青年が突然、世界に飛び出し「歩き旅」を始めた。関心は景色から人へ。旅路での出会いが彼の人生を大きく変えていく。

Photo ニューゼaland縦断、マウントクック近くの氷河へ

歩き人・ふみの 徒歩世界旅行記

寄稿

Profile

児玉文暁 (48)

(こだまふみあき)

1966年2月生まれ、橋町在住。1984年4月、徳島大学に入学。山岳部に籍を置き、初めての海外旅行でネパールや中国などを1人で旅をするなど、旅に魅せられる。1991年3月、某企業に就職するも、4年後に退職し、念願の世界旅行に出る。主な著書『歩き人ふみの徒歩世界旅行』(文芸社) ホームページ・ブログは「歩き人ふみ」で検索。

「旅に出るので会社を辞めます」渾身の勇気をふり絞り上司にそう告げるが、声のふるえは止まらなかった。一旦口に出してしまえば、職と給料を失うばかりでなく、社会的地位や信用、保険などのすべてが消え去って、二度と元の生活には戻れないことがわかっていったからだ。

ユーラシア大陸の西の果て、ポルトガルのロカ岬から徒歩世界旅行の第一歩を踏み出したのが1995年のこと。当時私は29歳だった。英語も話せず、他人と話をすることすら苦手な初心者だった私にとって毎日がびくびくもので、地元の人に話しかけられてもわからない言葉で会話を続けるのが苦痛で、避けるように口を噤んでしまうことが多かった。そんな私が、移動手段は自身の脚のみ、毎夜知らない場所にテントを張って1人眠るという日々を飛び込んだのは、ただただ自分自身の目で世界を見て歩く「本物の旅をしたい」という思いからだ。

以来、徒歩・野宿・自炊を基本とする旅を続け、ヨーロッパのポルトガルからスペイン、フランス、スイスと歩き、その健康になり、野営生活にも順応していった。有馬温泉や三重の旅館で仲居の仕事にも挑戦して経験を積み、どんどんとレベルアップしていく。

そして2013年10月、2人してついに日本最西端の沖縄県与那国島に到着。最後に四国を縦断して、12月に阿南市橋町の実家で日本徒歩縦断の旅にゴールすると同時に入籍した。

現在は、次なるステージに向けて阿南と札幌でそれぞれ仕事をして資金を貯めている。旅の舞台は再び海外に移り、今後は世界徒歩2人旅となる。いったいどんな出会いと冒険が待ち受けているのか。ワクワクの種は一生尽きない。

スと歩き、そのまま南米に飛んでウルグアイからアルゼンチン、チリに到達し、3年半ぶりに日本に帰国した(海や大陸間は交通機関を利用して)。その後、ニュージーランドとオーストラリア大陸も徒歩のみで縦断した。

そして、いまだ歩いたことがない故国、日本を歩いてみようかと、スタート地点と決めた北海道の知床の地に立ったのが2005年8月。沖縄の端まで歩こうと考えていたが、その旅がまさか8年以上の長きにわたるものになるとは思いもしなかった。徒歩・野宿の旅というのは日数だけはあきれるほどにかかるが、最も経済的な旅だ。最低限必要なのは、自炊のための食材費と風呂代くらい。しかも日本国内ならどこだって働ける。春から秋まで歩いて到達した場所まで住み込みの仕事を探し、冬の間だけ働いて貯めた資金で旅を続けた。札幌のごみ収集車助手、白馬のスキー場、箱根の温泉旅館洗い場、丹後の酒蔵で日本酒造り、さつま町で建設作業員など何でもやった。世界の旅は私という人間を少しず



日本歩き旅最終日。この格好で実家にゴールイン

歩き人ふみの徒歩の旅 足跡 約21,700km 2015年1月現在



日本列島徒歩縦断ルート



あゆみと2人で歩く(福岡県福岡市)

つ鍛え、変化させていた。どこの国に行っても「どうしてそこまで」というくらい親切にしてもらったことにより、旅における最大の興味は風景から人々との出会いに変わっていた。国内の旅中にそれまでの旅の経験を講演したりするようになり、やがて想像すらしなかった幸運が訪れた。

始めるが、彼女は病弱なうえに潔癖症気味、一軒家に一人暮らしで給料のすべてを家電製品やオーディオ機器につぎ込むという、私とは全く正反対の生活をしていて。だから本州に渡って南下を続けていたある日、電話に出た彼女の言葉に耳を疑った。「私も一緒に歩くことにしたよ」虫嫌いで、服が濡れたり汚れたりすることを極端に嫌い、椎間板ヘルニアと脊椎にも持病がある人である。

よし、でも一緒に歩いてみよう。17年間勤めた会社を辞め、私が到達していた長野県で合流したあゆみは、移動の疲れから一歩も歩き出さないうちに一週間で寝込んでしまう始末。しかし、反対していた周囲の大方の予想に反して、歩き続けるうちに彼女はみ